『ロシア風俗画』（巻子）に描かれる世界図についての予備的考察

田　中　和　子

Ⅰ　はじめに―風変りな巻子

本稿でとりあげる『ロシア風俗画』（巻子、20.6 × 939.5cm、手彩色）（京都大学文学研究科図書館所蔵）（**口絵 1**）のタイトルは仮称である[1]。もともとなかったのか、損傷などにより失われたのかは不明であるが、この巻子には、外題も内題も、また、序文や奥書もなく、書写者や書写の時期、由来等の情報を欠く。巻子では、まず、アジア大陸の大部分とオセアニアを欠く世界図が配置され、その中に 墨と朱の点線が描かれる。大陸内部の領域は区画され、色分けされ、地名が記入されている。「ヲロシヤ國ヨリ日本長嵜マテ海上日本里数ニ直メ凡一万四千百里」や「カナアリヤ島」など、里程や経由地の書き込みが数か所にある。これに続くのが、ロシアの諸民族とその衣装を詳細に描いた人物図 45 点である。人物図には「刺蒲蘭杜　漁夫之圖」や「婦人前身之圖」といった説明が付されているものもあるが、すべてではない。

『ロシア風俗画』には、大正 5（1916）年 2 月 28 日付けの登録印と登録番号（159983）が押されている。購入時の記録として残されているのは、「山本釘太郎より購入、価格 5 円」という情報のみである[2]。納入者についての手掛かりも、購入の経緯も明らかではない。『地理論叢　第三輯』（1934: 351-358）の古地図目録（京都帝国大学地理学教室所蔵）では、「一、世界全圖」の部の 28 番目に、「ロシヤ風俗圖（附世界圖）卷物」として掲載されており、巻子冒頭の世界図が分類の対象とされたことがうかがえる。

巻子は、表紙と尾紙が付けられており天地は切り落とした状態で仕立てられている。彩色が丁寧に施され、人物図の衣装の部分には、金泥が使用されているだけでなく、生地や装飾が極めて精密に描かれている。ただし、保存状態はあまり良好ではない。表紙の裂地や紐に傷みがある。本紙に描かれる世界図にも人物図にも、あちこちに汚

損や絵具のにじみがある。さらに、地図や絵、文字などの配置から、本紙の天地を含めて、損傷の激しい部分は裁断され、比較的傷みの少ない部分だけが貼り合わされたものと推測される。したがって、裁断前の状態は、現状の巻子の大きさよりも、幅も長さもかなり大きく、地図は世界全体を表すものであったかもしれないし、より多くの人物図が描かれ、異なった順番で並べられていたかもしれない。巻子の表装が異なっていた可能性もある。

『ロシア風俗画』の大きな特徴の一つは、通常の万国人物図とは異なった構成をしていることである。江戸時代に多く制作された万国人物図には、諸民族の絵と簡略な民族誌と世界図という要素があり、説明の文章か地図、もしくは両者を人物絵に組み合わせる形式がよく見られる（鮎沢 , 1950）。『ロシア風俗画』は、ロシアの諸民族の絵とそれぞれの民族誌という組み合わせではないし、世界図の代わりにロシア地図を付しているわけでもない。

『ロシア風俗画』は、近世に日本で作成された世界図に関する研究でも、鎖国体制のもとでの自他意識や人種観、世界観の形成と変容の面から注目される万国人物図の研究でも、これまで取り上げられていない資料である。この色鮮やかで風変りな巻子は何なのか、どのような理由で世界図とロシアの諸民族の人物絵が組み合わされ、どのような経緯で巻子が制作されたのかを明らかにするためには、まず、何が描かれているのか、どのような資料に基づいて描かれたのかを突き止める必要がある。本稿では、『ロシア風俗画』が描く内容と資料としての意味を明らかにするために、地図の部分を中心とした予備的な調査報告を行う。

なお、表記に関しては、本文中では常用漢字を用いるが、引用箇所や固有名詞等については、原文の表記に従う。また、地名や人名についても、本文では、現在、一般的に用いられる表記を採用しており、史料や文献に記載されたものと異なる場合がある。

Ⅱ　『ロシア風俗画』に描かれる人物図は何か―最初の手掛かり

1. 人物図の種本

『ロシア風俗画』が何かについての最初の手掛かりは、人物図から得ることができた。吉田（1996: 87）の図1と図2に、『ロシア風俗画』に描かれる人物図のうち三点によく似た図が掲載されている。これらのうち、図1は、長谷川延年（1803-1887）の著作である『万国人物図纂』（天保3（1833））（現、京都歴彩館所蔵）に所載される三人の人物図[3]、図2は、それらと対応する人物図三点で、Georgi, J. G.（1776-1780）. *Beschreibung aller Nationen des Russischen Reichs, ihrer Lebensart, Religion, Gebräuche, Wohnungen, Kleidung und übrigen Merckwürdigkeiten* の彩色銅版画95枚のみ収録したもの（現、文化学園大学図書館所蔵）の図版である[4]。『万国人物図纂』の三枚の図の右上に書写された番号「23.」、「52.」、「53.」は、原著の図版に付された番号と対応する。また、人物図を矩形に囲む枠がある形式も、枠の下に、上から順にロシア語とドイツ語とフランス語で書かれたキャプションの内容も、Georgi（1776-1780）の様式と記載に一致する。

ドイツの地理学者であるGeorgi, J. G.（1729-1802）の同書は、ロシアの地誌、諸民族や農民、漁師、コサック、入植者などの風俗習慣や衣装、家屋などについて記したもので、ドイツ語版とフランス語版が刊行されている。通し頁の4巻本であるが、彩色銅版画の人物図がテキスト中に挿入された版と、テキストのみの版がある。また、95点の彩色銅版画のみ収録した版もある。なお、Georgi（1776-1780）の彩色銅版画を転写したと推測される約80点の人物画をまとめた冊子が岩瀬文庫に所蔵されている[5]。これらの資料の書誌ならびに国内所蔵の詳細については、別稿にゆずる[6]。

『ロシア風俗画』の45点の人物図を国立民族学博物館所蔵のGeorgi（1776-1780）の人物図と比較したところ、背景の描き方の違いなどはあるものの、よく似ていることが確認できた[7]。さらに、文化学園大学図書館に所蔵されるGeorgi（1776-1780）の銅版画のみまとめた冊子の人物図と照合したところ、No. 5と6およびNo. 33から40を除く、No. 1から55の人物図と対応することがわかった。なお、銅版画No. 1から25はフィン系の人々をとりあげた第1巻、No. 26から55はタタール系の人々をとりあげ

た第2巻の挿絵である。第3巻（サモエード、満州や西シベリアの人々など）と第4巻（モンゴル系の人々とロシア人、その他の人々）に所載されるNo. 56以降の銅版画は写されなかったのか、失われたのかは不明である。

『ロシア風俗画』に収められた人物図の種本がGeorgi（1776-1780）の彩色銅版画あるいはその写しであるとして、本稿で検討すべき問題は、書写を行った絵師はどのようにその機会を得たか、そして、この人物図の書写と世界図がどうかかわるか、である。

2. 種本が日本へもたらされた経緯

吉田（1996: 86, 92-94）は、『万国人物図纂』に収められた三枚の人物図が「魯西亞鐫版人物図百枚之内」と題されていることから、文化元年（1804）秋に長崎に来訪したロシア使節ニコライ・レザノフ（Nikolai Petrovich Rezanov）（1764-1807）が通詞たちへの贈物としたものではないかと推測している。レザノフ来航のおり通詞を勤めた中山作三郎の家に伝わる『魯西亞滞船中日記』の文化2（1805）年3月10日の記録として、贈物のなかに、「一、小形天地球　壱対　一、属国人物図　弐組　但壱組百枚宛　一、地図　四組　但壱組三枚宛」があるが[8]、これら三品は、通詞たちの手には渡らず、奉行所に留め置かれることになった[9]。人物図百枚という枚数は、Georgi（1776-1780）の図版95枚とは一致しないが、概数としては符合する。

他方、ロシア側では、この「人物絵」については、どのような記録があるだろうか。レザノフが日本滞在中に残した日記に、長崎を去る直前（文化2（1805）年3月10日）、二つの地球儀と四枚のロシア帝国の地図とロシア民族について書かれた二冊の本を贈りたいと強く求め、受け入れられたことが記されている（Авдюков Ю.П. et al. eds., 1995: 224；レザーノフ, 2000: 332）[10]。また、ウォエンスキ（1908a: 287）も、ロシア皇帝の意向により、日本皇帝及びその重臣に贈与すべきとして用意された贈品リストのなかに、「(32) ロシア帝國内在住諸民族誌二冊、(33) ロシア帝國圖四葉」を挙げている。これらに共通する「ロシア民族」という表現からすると、用意された書物がGeorgi（1776-1780）であった可能性は否定できない。

『ロシア風俗画』の人物図の種本がレザノフの将来したGeorgi（1776-1780）の彩色銅版画である可能性が高いことを踏まえると、『ロシア風俗画』の世界図もレザノフ来

訪と関わりがある地図ではないかと推測できる。

Ⅲ　レザノフ来訪がもたらしたさまざまな地図

そこで、レザノフの来訪がどのようなものだったか、来訪により日本に将来された地図、また、来訪に関わって新たに作成された地図にはどのようなものがあるか、整理しておく。

1. レザノフ一行の長崎来訪と彼らがもたらした地図

レザノフがロシア全権大使として、日本に通商を求めて長崎に来航したのは、文化元（1804）年 9 月 6 日であった（レザーノフ , 2000）。レザノフによる通商交渉は、ロシア艦船ナジェジダ号の艦長アーダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルン（ドイツ語表記：Adam Johann von Krusenstern）（1770-1846）が進めていた世界一周周航計画に便乗するものであり、合わせて、寛政 6（1794）年にロシアに漂着した仙台藩石巻の若宮丸乗組員のうち、日本への帰国を希望した四人の引き渡しが意図されていた。来航に際して、レザノフ は、ロシアから初めての使節として日本に派遣されたアダム・ラクスマン（Adam Laxman）（1766-1806?）が、寛政 5（1793）年、松前で幕府から入手した長崎への入港許可証（信牌）を携えていた。レザノフは、艦船の修理などもあって、半年あまり長崎に滞在を余儀なくされた後、幕府から派遣された目付遠山金四郎景晋と三度の会談を行ったものの、通商交渉は拒否された。レザノフは、漂流民たちを引き渡した後、文化 2（1805）年 3 月 19 日、長崎を出港した。レザノフの来航は、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて、ロシアの南下政策やイギリス船の長崎入港など、日本をとりまく国際情勢が緊迫してゆく時期の事件の一つであり、海外への関心を高め、西洋の地理書や地図を介して新しい地理知識を獲得することが急務とされるようになったきっかけでもあった。

レザノフ来訪により将来された地図には 3 種あることが、明らかになっている（鮎沢 , 1952, 1962；海野 , 1977）。すなわち、ロシア帝国の地図 4 枚、アロースミス（Arrowsmith）図、世界図である。最初に挙げたロシア帝国の地図は、上述したように、ロシア側か

ら献上された通詞たちへの贈品の一つとして用意されたものである。ロシア帝国の地図のうち１組は、レザノフへの対応を担当した長崎奉行肥田頼常（寛政 11（1799）年 12 月から文化 3（1806）年 1 月まで在任）（小川 , 1997：第 4 巻 , 2268）が所持し、江戸へ持ち帰り、仙台藩主の後見役であった若年寄堀田正敦の仲介で借り受けられ、漂流民たちについての報告書（『環海異聞』）作成を担当していた大槻玄沢の手に渡ったことが分かっている（大槻 , 1804［大友校訂 , 1944]: 101-102）。しかしながら、その後の所在は不明である。このロシア帝国地図と同一か否かは確認されていないが、現在、横浜市立大学に所蔵される三枚一組のロシア帝国地図がレザノフ将来の地図で、それに対応する日本語訳の地図があることが確認されている（鮎沢 , 1962）(11)。二番目に挙げたアロースミス図は、レザノフ来航の対応にあたったオランダ通詞の一人、本木庄左衛門が、ロシアの一行の誰かに頼んで個人的に譲られた原図もしくは写図とされる（海野 , 1977: 113-115）。アロースミス（A. Arrowsmith）（1750-1823）は、1790 年に出したメルカトル図法による大判の世界図で知られる地図製作者・出版者である。本木がこのアロースミス図を誰に進呈したかは不明であるが、『北裔図説集覧備攷』（文化 8（1811）年序）には、この図の東アジア部分が「諳厄里亜國撰海上全圖所見蝦夷四境全圖」［甲］として掲載されている (12)。

三番目に挙げた世界図は、漂流民たちがロシアから持ち帰ったもので、「魯西亞都府印行する所の世界圖（方圖になせる物四枚、圓球の圖面一枚）」であった（大槻 , 1804［大友校訂 , 1944]: 99）。二種の世界図のうち、円球の図面の一部は、「文化元年歸國スル仙臺漂民津太夫等彼國在留中私ニ購得ルトコロニシテ原圖ハ即仙臺候ノ蔵タルヲ大槻氏譯スル所ナリ」と明記されて、『北裔図説集覧備攷』（文化 8（1811）年序）に「魯西亜國版世界全圖所見蝦夷四境全圖」［丑］として収録され、全図は、松原右仲によって『銅版萬國輿地全圖』（天保 9（1838）年、大槻磐渓識語）として復刻された（海野 , 1977: 108-112）(13)。航路との関わりの点で注目されるのは、漂流民たちが持ち帰った方図の世界図である。彼らの漂流記録をまとめた『環海異聞』の巻 15 では、この世界図に関して、ナジェジダ号に乗組んだ下案針役目の一人、ペーモロ・トロヘムイチ（オロシア人）の名前に添えて、次のように記載されている。「携來りし世界圖を、長崎滞留中見懸て曰、各通船の道筋を覺へたりやと、我々共答しは、數千里の事更に不覺と

いひけれは、上陸歸國の後、人々尋る事有ても當惑すべしとて、海路を朱引して與へたり。此萬國圖は、彼都にて銀四枚にて求めたりと」（大槻 , 1804［大友校訂 , 1944］: 438）。

2. ロシア艦隊の周航ならびに漂流民たちの帰還にかかわって作成された地図

では、漂流民たちが持ち帰った航路書き入れの世界図を含めて、レザノフやクルーゼンシュテルンらを乗せた艦隊の航路を描く地図として、どのようなものが作成され、写されたであろうか。ただし、ここでは、同一書物（たとえば『環海異聞』）の複数の写本の付図はとりあげない。

現在までに所在が確認された航路図を大別すると、長崎奉行所で作成された航路図とその写し、ならびに、ロシア艦船ナジェジダ号の艦長クルーゼンシュテルンが自身の報告書に付した航路図である。前者のなかには、ロシア側が提供した情報と地図に基づくものと、漂流民たちが提供した情報と地図に基づくものの２つの種類がある。

2 − 1. ロシア側の情報と地図に基づく二系統の航路図

長崎奉行所の役人たちにロシア側から航路にかかわる情報と地図が提供されたのはいつで、どのような内容だったであろうか。長崎奉行の命で編纂された『長崎志續編』（巻十三上）によると、長崎奉行所がロシア艦船の乗組員たちに最初の事情聴取を行ったのは、彼らが長崎へ入港した翌日（1804 年 9 月 7 日）である [14]。検使が通訳を介してロシア人たちに尋ねたところ、使節レザノフおよび艦長クルーゼンシュテルンから得られた回答として、来航の航路と日程を次のように記している。「一　魯西亞船壹艘、暦數壹千八百三年八月［享和三亥年六月廿四日］同所出船仕リ「テーネマルク」ノ内「マンペンハーガ」「カナリヤ」島幷ニ南「アメリカ」州ノ内「ブラシリヤ」國、夫ヨリ南海ヲ周リ、暦數一千八百四年九月三日［當子七月廿九日］「カムシカツテカ」ニ至リ同九月十日［當八月七日］同所出船仕リ、今日迄三十一日ブリ、海上別條ナク着岸仕リ候、右壹艘ノ外御當地渡来ノ船無御座候」。さらに、9 月 14 日の記録として、「魯西亞國ヨリ日本迄ノ道法／魯西亞國府ヨリ「デーネマルカ」エ　五百里程／「デーネマルカ」ヨリ「アンゲリヤ」エ　六百里程／「アンゲリヤ」ヨリ「カナリヤ」島エ　貳千里程／「カナリヤ」島ヨリ「ブラジリ」エ　三千里程／「ブラジリ」ヨリ「マルケーサ」

島エ　四千里程／「マルケーサ」島ヨリ「カムチカツトカ」エ　三千里程／「カムシカツトカ」ヨリ日本エ　千里程　／合　壹萬四千百里」（／は改行を示す）と航路にそって停泊地間の里程が記されている。

以上の記録から、9月7日から同14日頃には、長崎奉行所側は、ロシア乗組員たちから、来航の経路と里程の情報を得ていたことがわかる。

この聴取報告の付図として長崎奉行所で作られた航路図（あるいは写し）に最も近いと考えられるのが、(A)「魯西亞乗筋圖」（『長崎志續編』）である（**図1**）。この「乗筋圖」では、「墨色　日本へ乗リ來ル筋」と「朱点　本國へ歸ル乗筋」が描き分けられ、来航の際も帰還の際も、いったんカムシカツトに寄港するルートとなっている。大陸名だけでなく、地域名・国名のほか、島嶼や喜望峰の地名も漢字とカタカナで書き込まれている。オーストラリア大陸は新阿蘭陀、ニュージーランドは新賒蘭地曷と表記されている。カリフォルニアは半島として描かれ、南アメリカ大陸南岸の向かいにはメカラニカ島がある。地図全体では、図面の左右に、アジア大陸およびオセアニアの東部が描かれる。ロシア領の部分に薄茶で縁取りがされ、沿岸に近い海洋部分が薄青く塗られている。日本は赤く塗られ、日本、エゾ、琉球という地名が記載されている。

(A)「魯西亞乗筋圖」をはじめとするロシア側情報に基づく航路図の系統に含まれるのが、(B)「ヲロシヤ国ヨリ日本へ乗筋ノ圖　ヲロシヤ人御奉行所へ差上ル圖ノ寫」（武田孟文『俄羅斯亞雜話』）および（C)「難民巡行之地図」（『魯西亜漂流之記』（愛日文庫所蔵））である。『俄羅斯亞雜話』は、文化二年（1805）の秋、諸方の記録（公儀による文書）と見聞をもとに書かれたものであり[15]、『魯西亜漂流之記』文化2（1805）年末頃）は、仙台藩の役人平井・久保田・小関らに連れられて長崎から仙台に戻る途中の漂流民たちの一行が、同年11月29日から翌月1日まで大坂に逗留した際、その旅宿に訪ねた著者（欠名）[16]が、そのときの談話や関係書類をもとに、まとめ上げたものである（海野 , 1977: 105-108）。

ロシア側の提供した情報・地図に基づく航路図には、大陸ごとの塗分けがある多彩色版も2点ある。まず挙げられるのは、(D)「航海図」（宮崎成身『視聴草』三集之九）（**図2**）である。『視聴草』（天保元（1831）年自序）（全176冊）は、『通航一覧』の編集に加わった宮崎成身が30年以上にわたって、自身の手元にある資料や記録をまとめ

図 1.「魯西亞乗筋圖」（『長崎志續編』巻 14、巻 16）（長崎歴史文化博物館所蔵）
Figure 1. "*Roshia norisuji zu* (route map of Russian ship)" (attached figure of "*Nahasaki shi zokuhen*" (Nagasaki history, additional edition). (collection of Nagasaki Museum of History and Culture).

図 2.「航海図」（宮崎成身『視聴草』三集之九）（内閣文庫所蔵）
Figure 2. "*Kokai zu*" (shipping route map) (attached map of "*Mikki gusa*" (memorandum) by Miyazaki Seishin, volume 3, no. 9). (Collection of National Archives of Japan).

たものある。同書の三集之九で「異船漂着二條」を扱い、その最初の條が「文化元年九月六日魯西亞船壹艘長崎江渡來之次第」の記録である。この條の冒頭に、航路図の他、レザノフ一行の人物図、ロシア船の彩色絵が付されている[17]。本稿の印刷ではモノクロで、「航路図」（**図 2**）の彩色の様子をうかがうことができないが、『視聴草』では、赤く縁取りした国々はヨーロッパ州、浅黄色の国々はアジア州、紫の地色の部分はアフリカ州、薄墨赤は南アメリカ州、萌黄色は北アメリカ州と、五大州を塗分け、さらに、ロシア内の三領土を萌黄、萌黄、鬱金、桃色で塗ったと記している。航路については、黒色は日本への来航の道筋、朱色の線は、ロシアへの帰国航路として経路を説明し、「右ヲロシヤ人物語なり」と情報源を明記している。同様に、経由地のヌカイワ（南アメリカ西にある海洋島）の風俗も、ロシア人情報として記載されている。この他、ロシア内の三つの領土の気候と農業生産の特徴、ロシア出港から長崎までの里程の情報も記されており、これらの内容は、『長崎志續編』（巻十三之上、下）や『通航一覧』（巻之 275（魯西亞國部三）、318（同四十六））のそれと一致する。大陸やロシア領内の彩色の仕方は異なるが、(E)［世界図（仙台漂民津太夫らの航路朱筆地図）］（仮題）（横浜市立大学鮎沢文庫所蔵）もまた、同系統の多彩色航路図である（鮎沢 , 1962）[18]。大陸の形状や記載された地名は、(A)「魯西亞乗筋圖」（『長崎志續編』）（**図 1**）にほぼ対応し、周囲に書き込まれた、航海の経路や里程、ロシア領内の農業生産の内容は、(D)「航海図」（『視聴草』）とほぼ同じである。

2 − 2. 漂流民側の情報と地図に基づく彩色版航路図

他方、漂流民たちに対して奉行所側からの事情聴取が行われたのは、いつで、どのような内容だったであろうか。漂流民たちと日本の役人たちとの接触機会は限られていたようである。『通航一覧』によると、ロシア艦船が長崎に入港した 1804 年 9 月 6 日当日、ロシア人乗組員たちへの簡単な事情聴取が行われたのと同様に、漂流民たちに対しても、氏名、出身地、年齢、漂流の経緯等、簡単な聴取が行われた（巻之 275（魯西亞國部三））。ただし、この後は、漂流民たちへの接触は厳しく制限され、徹底した情報管理が行われた。同年 11 月 24 日に老中より届いた下知状を受け、同月 26 日には、肥用豊後守と成瀬因幡守（ロシア船来航への対応のため二人奉行体制であった）は、

奉行所の役人たちや通詞たちへも直接の対応や会話などを細かに禁じている（巻之280（魯西亞國部八））[19]。漂流民たちへの本格的な聞き取りが行われたのは、彼らが長崎の地を踏んでから半年以上経た、1804年3月10日、日本側への引き渡し後であった。彼らは、「立山役所御白洲へ被召、一通御糺しあり、其後追々罷出る、踏繪等被仰付相濟、御定法の通揚り屋へ被相入」となり、仙台藩からの迎えの役人たちと帰国の途に就くまで、さらに半年あまり、長崎にとどまる。長崎奉行所による漂流民たちへの聴取の内容は、『長崎志續編』巻十三之下「漂流日本人口書」ならびに『通航一覧』巻三百十九「魯西亞國部四十六　〇漂流」に詳しく記されている。彼らの口述は、ロシア帝国領内の地誌、人種、風俗習慣などの他、若宮丸の難破と漂着の様子、同船の仲間たちの消息、ロシアでの苦しい生活、サンクトペテルブルクへの移動、皇帝への謁見、ロシアを出発して長崎までの航路と停泊地の様子などについてまとめられ、3月29日、彼らの連名で、奉行所に提出された。長崎奉行所による聴取に際して、彼らの帰還経路を示す航路図が作成されたはずであるが、原本の所在は確認されていない。

長崎奉行所による事情聴取に次いで、公的な立場で、漂流民たちへの聞き取りができたのは、仙台藩から報告書作成の命を受けた大槻玄沢と志村弘強である。漂流民たちは、仙台藩から長崎に差し向けられた役人に帯同され、故郷石巻へ戻る。その途中、文化2（1805）年12月末頃から約40日間、江戸の藩邸において、大槻と志村により、ロシアの生活や風俗、言語、地誌、航海などについて、詳細な聞き取りが行われた。その後、草案の作成や校訂、地図の翻訳、整理等、膨大な作業を経て、文化4（1807）年初夏に脱稿したのが『環海異聞』であり、同年秋、藩主に献上された（杉本, 1986: 469-470）。この『環海異聞』には、漂流民の帰国航路を示す世界図（彩色）の他、漂流民たちから得た情報に基づいて描かれた多くの挿絵（彩色）も添えられている。

この『環海異聞』に付された（F）「魯西亜使節船本朝へ渡海せし船長崎に於て書き上しといふ略図」は、まさに漂流民側からの情報と地図に基づく航路図である。**図3**に示すのは、藩主への上呈本の副本として作成されたとされる写本（愛日文庫所蔵）に所載されている航路図である。この副本は、文化5年（1807）12月、仙台藩の蔵元御用を引き受けていた大坂の豪商、升屋の四代目当主山片重芳が、仙台藩主より拝領したもので（海野, 1995a, 1995b）、現在は、山片重芳旧蔵本を収める愛日文庫（大阪

市立開平小学校内）に置かれている[20]。仙台藩主への上呈本は現存が確認されていないが、上呈本と同様の体裁で、極力似せて造られるものという副本の役割を踏まえると、**図 3** の航路図（世界図）は、上呈本のそれに近いものと考えてよかろう。

この航路図（**図 3**）の大きな特徴は、「ヘイトルブルケ―カナリヤ―エカテリナ―マルゲサ―カムシカツト―伊王嵜」までの経路が黒の点線で描かれていること、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカの四大陸が色分けされいること、図の右（東）がアジア大陸全体で始まり、左（西）に再びアジア大陸の東側が描かれることである。赤道は図示されず、地名の記入も少ない。海野（1977：105）は、この世界図を詳細に検討し、図に添えて「譯官ノ書キ上ケユヘ如此書セルナルベシ」と記されている点から、『環海異聞』の世界図は、長崎で作成された漂流民たちに関する調書の付図を写したものであること、また、調書の付図は、ロシア人乗組員が航路を書き入れた漂流民たちの世界図を写して作成された可能性が高いと推測している。さらに、東アジアの部分が重複して描かれる特徴から、漂流民たちが持ち帰った世界図が、当時の日本にはほとんど伝来していなかったメルカトル図法によるものと指摘している。

大槻らは、漂流民たちがロシアで買い求め、ロシア人乗組員にロシアから日本への航路を書き入れてもらった世界図について、詳細な分析を行い、写図も作成している。『環海異聞』に付す航路図として、大槻ら自身による写図ではなく、長崎で作成された漂流民たちに関する調書の付図を写した地図を採用したのか、やや不可解であるが、大槻らの作成した地図では、地形の形状や地理情報が詳細すぎたのかもしれない。

『環海異聞』の航路図と、大陸の形状や配色、周囲の説明文の内容が非常によく似ており、前者の写図と考えられるのが、（G）「漂流民津太夫帰国航路図」（静岡県立中央図書館葵文庫所蔵）である[21]。ただし、図に添えた「于時享和二亥年九月」は誤記と思われる。享和 2（1802）年の干支は壬戌であるだけでなく、漂流民が日本へ戻ったのは文化元（1804）年である。

以上の検討から、（F）「魯西亜使節船本朝へ渡海せし船長崎に於て書き上しといふ略図」（『環海異聞』）（G）「漂流民津太夫帰国航路図」（静岡県立中央図書館葵文庫所蔵）の 2 点を、漂流民側の情報に基づく彩色版航路図の系統とみなす。

なお、ロシア側ならびに漂流民側の情報と地図に基づく彩色航路図として、本稿で

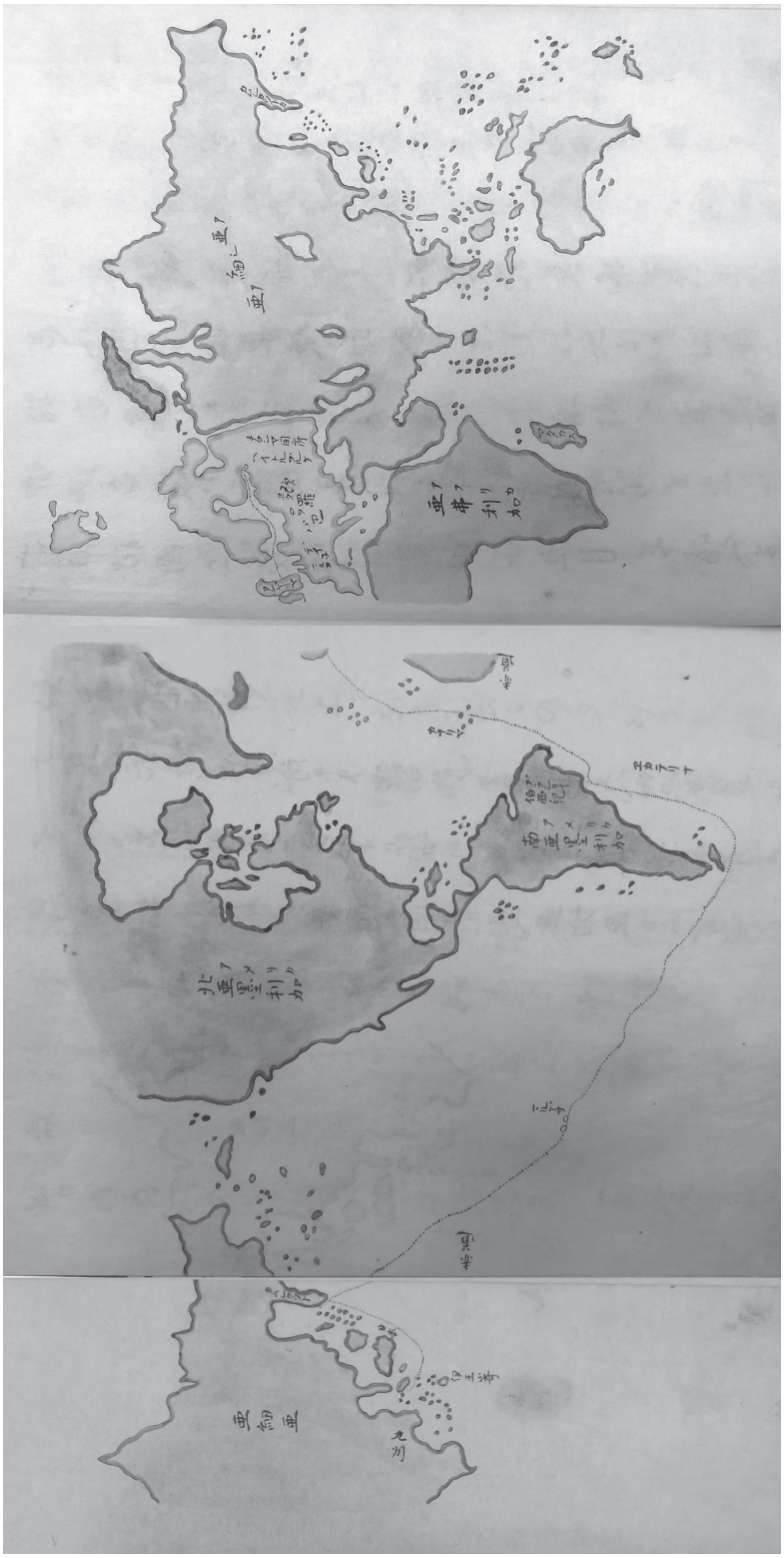

図 3.「魯西亜使節船本朝へ渡海せし船長崎に於て書き上しといふ略図」（『環海異聞』）（愛日文庫所蔵）
Figure 3. "Schematic map of the route by Russian ship: drawing in Nagasaki" (attached map of "*Kankai ibun*" (drifting travelogue around the world)). (Collection of Ainichi Bunko).

検討した７点の地図の他に、朝野北水の天文講義を聞き書きした『天象話説記聞』（朝野北水述；吉田尚典等編：文化９（1812）跋）に付された航路図が挙げられている（中村, 2020）。ただし、高遠町図書館所蔵の写本と新城市図書館牧野文庫所蔵の写本とでは、ロシア本国への帰還航路の有無や地名情報量などの相違がある他、朝野北水が長崎で航路情報を得ることができた機会など、確認すべき点がいくつかあるため、本稿での検討は保留しておく。

２－３. ナジェジダ号艦長クルーゼンシュテルンが作成した航海図

最後に、ロシア艦隊の世界周航路の地図を示し、日本で作成された奉行所調整のさまざなま航路図およびその写しと比較しておく。

クルーゼンシュテルンをナジェジダ号の艦長とする世界周航は、シベリアを経由して東方進出をめざすロシアにとって、日本や中国、東南アジア方面との太平洋航路の開発と交易拡大、極東北アメリカ大陸における植民地経営といった急務の課題を達成するために不可欠な事業として計画されたものであった（河合 , 1997: 4; レザーノフ , 2000: 7-10）。アラスカ - マカオ間の太平洋航路の開拓を考えていたクルーゼンシュテルンに対し、アメリカ海岸におよびカムチャッカ半島の経営や貿易に絶対的な特権を有していたロシア・アメリカ会社の重役は、1803 年、探検航海の経路を詳細に指示した（ウォエンスキ , 1908b: 375-376）。それによると、クロンシュタットを出港し、カナリヤ諸島を経由して、大西洋を南下し、ブラジル沿岸のサンタカタリーナ島に碇泊、そこからホーン岬を周り、太平洋に出て、マルキーズ諸島からサンドウィッチ諸島を経て、長崎へ至り、当地での任務を遂行。その後、いったん、カムチャッカ半島のペトロパヴロフスクに戻り、再び太平洋を南下して、広東へ向かうというものであった。したがって、ロシアを出港する際には、日本までの航路およびそれ以降の航路についても計画されていたことは明らかである。

実際にどのような世界周航がなされたかは、クルーゼンシュテルンがロシアに帰国後に著した詳細な航海記とアトラス（地図やスケッチを含む）からうかがうことができる。クルーゼンシュテルンは、まず、これらをロシア語版（1809-1813）、ついで、ドイツ語版（1810-1814）で出版した。同書は、英語、スウェーデン語、フランス語、

オランダ語のほか、多くの言語に翻訳して出版された（クルウゼンシュテルン , 1931: 上巻 , XXXV-XXXVII）[22]。ただし、アトラスはロシア語版とドイツ語版のみである。

実際の周航経路を示す地図も作成され、アトラスに所収されている（Krusenstern, 1813）。メルカトル図法による世界図上に描かれたナジェジダ号の航路は、1803 年 8 月、クロンシュタット港を出港して、西回りに進み、カムチャッカのペトロパヴロフスクを拠点に長崎への往復や樺太やベーリング海沿岸の探査を行った後、日本の東を通り、マカオを経由して、スンダ海峡を通過し、インド洋から喜望峰を回って、北上し、1806 年 8 月、クロンシュタット港へ帰還したことを示す。この世界図から、大陸の海岸線と航路をトレースしたものを**図 4** に掲げる。北極圏の陸地の海岸線に未詳の部分があるが、オーストラリア大陸は大陸として、カリフォルニア半島は半島として描かれている。また、地図の西端は西経 120 度で、カリフォルニア半島の北部付近が図幅に入る。南北の範囲は、北緯 80 度付近から南緯 60 度付近までである。ロシアから出港の際には、英仏海峡を通過したのに対し、ロシアへの帰還の際は、イギリスの北を回るコースをとっている。

大陸の描き方の精粗は別にしても、大陸の配置から見ると、長崎奉行所によって作成された航路図のベースマップと、クルーゼンシュテルンの航海図のベースマップは異なることが明らかである。アフリカの西岸からロシアまでの航路が往復とも同様のコースとして描かれる長崎奉行所の航路図およびその写しとの違いも明らかである。

Ⅳ　『ロシア風俗画』の世界図

1. 航路と大陸の特徴

改めて、『ロシア風俗画』にある世界図（部分）と航路がどのように描かれているか見てみよう（**口絵 1**）。航路は、南アメリカ大陸の南を回るコースは黒の点線で、アフリカ大陸の南を回るコースは赤の点線で描かれている。航路にかかわる情報として、「ヲロシヤ國ヨリ日本長崎マテ海上日本里数に直メ凡一万四千百里」、「カナアリヤヨリブラジリーンマテ三千里」、「（ブラ）シリーンヨリマルケーサマテ四千里」、「マルケーサヨリカムシカツトマテ三千里」という里程のほか、経由地あるいは近くを通るところ

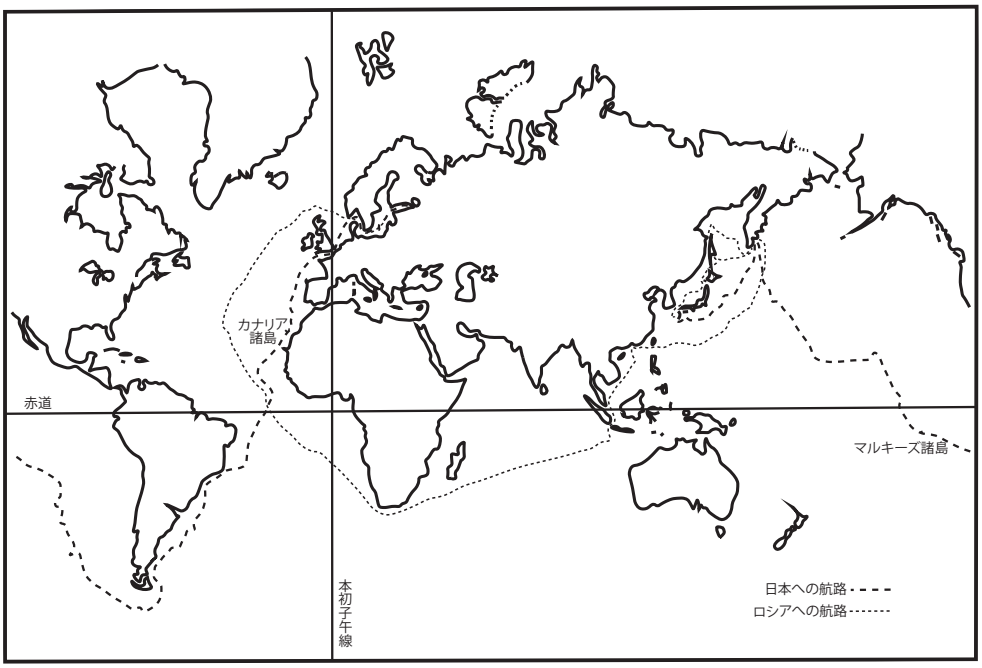

図 4. “World map by Mercator projection: designed by Captain Krusenstern, Russian Imperial Navy, 1813” に示されるクルーゼンシュテルン率いるロシア艦船ナジェジダ号の世界周航路（*Atlas of the voyage round the world* by Adam J. von Krusenstern (reprinted version) に所収された世界図から筆者が海岸線や航路などをトレースしたもの）。
Figure 4. Shipping routes and continental coastlines depicted in “World map by Mercator projection: designed by Captain Krusenstern, Russian Imperial Navy, 1813”. (The author traced the world map contained in *Atlas of the voyage round the world* by Adam J. von Krusenstern: reprinted version).

として、「カナアリヤ島」、「マルケーサ」、「銀河」、「カープデルクーデホー（プ）」が書き込まれている。銀河は、スペイン語の Río de la Plata（ラプラタ川）の邦訳である。

日本への来航路線とロシアへの帰還路線の色の区別、また、アフリカ大陸の西側からヨーロッパとの間の 2 つの航路がほぼ並行している点は、両路線を描く他の航路図、すなわち、ロシア側情報に基づく航路図の描き方と同様である。また、地名表記の揺れはあるものの、地名や里程の情報も、『長崎志續編』、『通航一覧』の記載と一致する。したがって、これらの特徴からすると、『ロシア風俗画』の世界図は、Ⅲ章 2-1 節で検討したロシア側情報に基づく航路図の系統とみなすことができる。

しかしながら、大陸の海岸線や彩色の仕方と書き込まれた地名の点で、『ロシア風俗画』の世界図は、先に挙げたいずれの彩色航路図とも大きく異なっている。大きな相違点の一つは、南北アメリカとアフリカ大陸およびヨーロッパの内部に領域区分がな

され、区域ごとに異なった彩色が施され、墨で地域名が書き入れられていることである。カリフォルニアがアメリカ大陸西岸に位置する島として描かれているのも大きな相違点で、ほかの航路図はいずれも、カリフォルニアは半島として描かれている。このことから推測すると、『ロシア風俗画』の世界図の元となった地図は、カリフォルニアが半島と認識される以前の時期に作られたものと考えられる。『ロシア風俗画』の世界図が、クルーゼンシュタインの航路図（1813 年）のベースにされているメルカトル図法の世界図より以前のものであることは明瞭で、レザノフ来航以前に日本に伝来した西洋製の世界図、あるいは、それの写図のなかでも、やや古いタイプのものを元にした可能性がある。

2. ボアソ（Jean Boisseau）図のさまざまな写しとの類似性

18 世紀末頃に日本で書写された世界図を探したところ、下記の 4 点が『ロシア風俗画』の世界図と非常によく似ていた。いずれも、東西両半球図で、それまでの仏教系の世界図やマテオ・リッチ系の卵型世界図に代わって、江戸時代後期に大流行した蘭学系の東西両半球図のなかで、最も古い系統に属する（鮎沢 , 1953: 227: 小野田 , 1999: 114）。

林子平『世界之図』（安永 4（1775）年）（仙台市博物館所蔵）（手書彩色、四番めに挙げる伊能忠敬の『世界図』の約半分の大きさ）（鮎沢 , 1940；織田 , 1990）[23]

『林子平の地球圖の写し』（寛政 9（1797）年）（横浜市立大学所蔵）（58 x 114cm、写本、彩色）[24]（**口絵 2**）

中山武成『万国図』（安永 8（1779）年）（神戸市立博物館所蔵）（99.1 x 199.2cm、手書彩色）（三好 , 1999: 63）[25]

伊能忠敬『世界図』（伊能家所蔵）（畳大の雁皮紙に直径 89.3cm の東西半球図、墨写彩色、朱色の書き込みあり）（鮎沢 , 1945；織田 , 1990）

これらの世界図が元にしているのは、1645 年頃にボアソ（Jean Boisseau）（1631 以前 -1657 以降）が作成した世界図とされる（織田 , 1990: 279；小野田 , 1999: 119）。というのは、オーストラリア大陸北東部のカーペンタリア湾が大きく拡大し、東部はニューギニアとつながるという特徴は、ボアソ（Boisseau）図独特のものだからである。

ボアソ図のもう一つの大きな特徴は、カリフォルニアが、半島ではなく、島として描かれていることである（Shirley 1983: 385-387）[26]。林子平の『世界之図』は、オランダ通詞の松村元綱が描いた世界図を写したものである。松村の世界図はボアソ図を元にしたものであり、このボアソ図を松村に贈ったのは、1771 年から 1881 年までオランダ商館長を勤めたアレント・ウィレム・フェイト（Arend Willem Feith（1745-1782））とされている（織田 , 1990: 71）。松村元綱（? - 1976?）は、『和蘭航海略記』や『新増万国地名考』を著し、同じオランダ通詞の本木良永（1735-1794）（桑木 , 1926a, 1926b）による訳書『阿蘭地図略説』（明和 8（1771））などの校訂にあたった蘭学者でもあった（岡田 , 2011: 122-127；芳 , 1976）。

上記の 4 点のうち、中山の『万国図』と伊能の『世界図』の大きさはほぼ同じで、どちらも、河川や山地の様子が詳細に描かれている。中山の『万国図』では、万里の長城が途切れつつ連なる様子も描かれている。中山武成はオランダ通詞で、蘭和辞典「ドゥーフ・ハルマ」の校訂にあたった中山作三郎（武徳）（1785-1844）（呉 , 1968: 3 巻 , 192-193）の父にあたる。伊能忠敬が地球図を模写した時期は明確でないが、鮎沢（1953: 232）は、寛政期（1789-1801）の中ごろ、伊能が江戸へ出て、天文方の高橋至時（1764-1804）に学んだ頃ではないかと推測している。また、伊能の『世界図』に見られる朱色の書き込みは伊能自身のもので、司馬江漢『地球全図』（寛政 4（1792））に基づく情報とされる（織田 , 1990: 280; 佐藤 , 1990: 口絵）。

これら 2 点と比べると、松村元綱の図を写した林子平『世界之図』および、それをもとにした再写図である『林子平の地球圖の写し』は、約半分の大きさで、山地や河川がほとんど描かれていないこと、また、地名の漢字表記も必ずしも対応しないことなどから、中山や伊能による写図とは、別系統のものとされている（織田 , 1990: 280）。『三国通覧図説』（天明 5（1785））や『海国兵談』（天明 8（1788））の著者として知られる林子平（1738-1793）の『世界之図』は、初めて長崎に遊学した安永 4（1775）年の冬、林が松村元綱所蔵の世界図を借りて写したものである（鮎沢 , 1940: 247-249；小野田 , 1999: 119；岡田 , 2011: 115-121）。

こうした検討を踏まえると、大きさと詳細さの点から、中山や伊能による大判（ボアソ図に近いサイズ）の写図と林らによる縮小版（約二分の一サイズ）の写図、二種

類があったことがわかる。ただし、松村元綱の描いた写図の大きさや内容はどうだったのか、中山は松村が所蔵するものとは別のボアソ図を写したのかなどの点については明らかになっていない。

3.『ロシア風俗画』の世界図―未完の東西両半球図

大判と縮小版の二種、あわせて4点のボアソ図の写図と比較すると、『ロシア風俗画』の世界図は、大陸内部の領域区分や配色、地名等の点から見て、林らによる写図に非常によく似ている。けれども、『ロシア風俗画』の世界図は、黄道や南北回帰線などは引かれず、赤道のみが赤線で示されている他、二つの円（東西両半球）の枠囲みがなく、一見すると、両半球図とは異なる図法で描かれている印象を受ける。

そこで、『ロシア風俗画』の世界図（**口絵1**）が、両半球図を意図して描かれたものかどうかを検討してみる。同図は、損傷のため、図幅の上下（南北）にあたる部分が切り取られており、元の状態での大きさが不明であるが、大陸の幅などに基づいて計算すると、『林子平の地球圖の写し』の約60％の大きさと推定される。そこで、縮小率をほぼ同一にして、『ロシア風俗図』の世界図をトレースしたものを、『林子平の地球圖の写し』（**口絵2**）に重ねてみると、大陸の配置も地域区分の境界線の位置もおおむね対応する。同様に、ほぼ対応する位置に、半球図の囲みの枠線（円）を書き入れると、東西両半球図の形式となる。これらの点からすると、『ロシア風俗画』の世界図のベースマップは、本来は、東西両半球図として描かれようとしたものと推測できる。未完成の写図のなかに、航路等の情報が書き入れられた可能性を指摘できる。

では、『ロシア風俗画』の世界図は誰の所有する未完の写図であったのか、また、その図に航路の書き入れを行ったのは誰で、時期はいつなのか。これらの点を明らかにすることは、『ロシア風俗画』がどのように成立したか、その経緯の解明にもつながると期待できる。検討に際して注目したいのは、長崎のオランダ通詞たちの関わりである。ボアソ図の写しを行った中山武成も松村元綱も、さらに松村と親しかった本木良永も、いずれもオランダ通詞である。レザノフ来航に際して、通詞として対応にあたり、航路情報に接する機会があった本木庄左衛門（1767-1822）[27] は本木良永の息子、また、中山作三郎（武徳）[28] は中山武成の息子である。彼らは、直接ではないにしても、ボ

アソ図の写図に関わりをもつ人々であったことを指摘しておきたい。なお、レザノフは滞在記に、本木庄左衛門が「我々の航海の碇泊したところをすべて書き入れた地図」を見せてくれたと記している（Авдюков Ю.П. et al. eds., 1995: 152；レザーノフ , 2000: 132）。この出来事は、文化元（1804）年 10 月 14 日のことであり、本木の得た航路情報が奉行所がロシア側への聞き取りで得たものであることは確かである。本木が手にしていた地図が何であったか、奉行所が作成した航路図の写しか、本木自身が持っていた別の地図か、さまざまな可能性が考えられる。Ⅲ章 1 節で説明したように、レザノフ一行の誰かから個人的にアロースミス図（あるいはその写し）を譲り受けたのが本木庄左衛門であったことも合わせて考えると、彼が地図に強い関心を持っていたことは確かであろう。

レザノフ来航時の対応にあたったオランダ通詞の中には、後に幕府の天文方蝦夷地御用に出仕し、シーボルト事件に連座することになった馬場為八郎（貞歴）（1769-1838）もいた。江戸時代後期、蘭学を通じて、通詞たちが天文・地理知識の拡大に尽力したことは、つとに知られている（小野田 , 1999: 123）。『ロシア風俗画』の世界図に関わったのは、特定の誰か一人ではなく、複数の通詞たちだったかもしれない。

Ⅴ　『ロシア風俗画』は何か―特異な万国人物図

以上の調査と検討から、『ロシア風俗画』の人物図が何をもとにして描かれたか、また、その世界図が示す航路とベースマップが何であるか、明らかにすることができた。これを踏まえ、本稿の冒頭に挙げた、「この色鮮やかで風変りな巻子は何なのか、どのような理由で世界図とロシアの諸民族の人物絵が組み合わされ、どのような経緯で巻子が制作されたのか」の問いに対して、現調査段階での回答を次のように示しておく。『ロシア風俗画』は、世界図とロシア諸民族の人物図という変則的な構成であっても、やはり万国人物図の一種とみなすことができるのではないか。万国人物図の性格自体、18 世紀前半から 19 世紀後半への百年余りのうちに、自己の修養のために世界の諸民族の特質を知る啓蒙・教養書から、国防のための海外情報書へと変質してゆく（鮎沢 , 1950）。その一方で、娯楽読み物や実用百科といった類の書物や双六などにも万国人物

図の内容が取り込まれ、異国に対する興味が一般庶民の間にもひろがってゆく（海野，2004a, 2004b；ポロヴニコヴァ，2013）。さまざまな性格の万国人物図が多様な形式で、幅広い読者層に向けて数多く制作されたことからすると、『ロシア風俗画』も万国人物図の一つととらえることができよう。

また、『ロシア風俗画』の世界図も人物絵もレザノフ来航と密接なかかわりをもつことを踏まえると、この巻子が、当時の日本の社会情勢を示すものであることは確かである。『ロシア風俗画』から伝わるのは、日本を取り巻く国際情勢の緊張だけでなく、オランダ通詞や蘭学者たちが西洋の書物や地図を学ぼうとする努力や彼らの学習成果への期待である。

本稿では、『ロシア風俗画』は、レザノフ来航をきっかけに成立した特異な万国人物図、すなわち、ロシアを介して世界に目を向けようとする図譜とするとらえ方ができることを示しておく。これを検証し、『ロシア風俗画』がどのような学術的意義をもつ資料なのかを明らかにするためには、ロシアの諸民族の人物画の制作の状況、ならびに、『ロシア風俗画』の成立の経緯と関与した人々を解明する必要がある。ここでは、これらについての今後の調査のための予備的な検討と作業仮説のみ、述べておきたい。

人物画の制作に関わった絵師として、どのような人物なら可能かという点からすると、いくつか条件が考えられる。たとえば、模写を依頼され、金泥など高価な絵具の使用が許され、Georgi（1776-1780）の彩色銅版画集を見る機会を与えられ、かつ、西洋風の絵を描く技量を備えた絵師である。ただ、この人物図の制作に関しても、各人物図に添えらえた説明の語句（ロシア語、ドイツ語、フランス語）の翻訳が必須であり、通詞あるいは洋学者の関与も想定されなければならない。合わせて、レザノフから贈呈され、長崎の役所に留め置かれたロシア帝国の地図や人物図が、その後、誰の手に渡り、どのように所蔵されたかも追跡する必要がある。また、『ロシア風俗画』の損傷前の本来の形態がどうであったのかを調べる必要もある。たとえば、世界図の他に、ロシア領内地図が付されていたか、総計何点の人物図があったのか、ロシア領内地誌に関する別冊は無かったかなどの点の調査である。

他方、『ロシア風俗画』を作ることを企画し、必要な手立てを整えることができた人物を絞るにも、いくつかの条件を勘案する必要がある。たとえば、レザノフが贈呈し

た Georgi（1776-1780）の本を、借用であれ、所蔵であれ、手元に置く権限を有すること、航路情報入りの「世界図」を入手できる、あるいは、進呈される地位であること、絵師の手配を指示できること、レザノフ来航の処理あるいは漂流民たちの処遇にかかわったこと、蝦夷やロシアを含む北方情勢に関心があること、などである。さらに、学問とくに洋学や文化・芸術に積極的で、情報収集に熱心なことも加えてよい。

こうした条件を備えた人物についての仮説として、若年寄堀田正敦（1755-1832）を挙げておく。堀田正敦（近江堅田藩主、後に、下野佐野藩藩主）は、寛政 2（1790）年、老中であった松平定信（1759-1829）に抜擢されて若年寄となり、43 年間にわたってその職を勤めた（高澤 , 2012: 144）。まさに幕府の中枢部に長くいた人物である。レザノフおよび漂流民の一件との関わりという点では、大甥である仙台藩主、伊達周宗（1796-1812）の後見役を勤めており、藩医で蘭学者の大槻玄沢らを支援して、漂流民たちの記録として『環海異聞』を作成させたのも堀田の主導によるものとされている。大槻らのために、レザノフ将来のロシア本領図を長崎奉行を勤めていた肥田頼常からの借用を仲介したのも堀田であった。堀田は、文化 4（1807）年 6 月、ロシア人侵入（文化露寇）事件にかかわる蝦夷地視察を命ぜられ、レザノフ来訪のおりに幕府の使者として対応した遠山金四郎景晋もこれに同行した [29]。堀田は、江戸を発つ直前に、完成したばかりの『環海異聞』を仙台藩から借り受け、大槻玄沢の息子を伴うことを求め [30]、さらに、仙台からは漂着民たちも連れて蝦夷へ赴いた [31]。この視察記録は『松前紀行（蝦夷紀行）』（文化 5（1808）年完成）にまとめられている。これらのことからうかがえるのは、堀田の国防や北方への関心の強さとレザノフ来訪事件が与えた影響の大きさである。地図製作や天文研究の推進という点では、伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』作成事業を後援し、間重富（1756-1816）・高橋至時（1764-1804）を天文方へ採用し、改暦作業に当たらせたことが挙げられる。堀田自身、博物学ことに鳥類に関心が高く、『禽譜』ならびに『観文禽譜』などの編纂にあたった。これらは、本草学的博物学に基づく最高の鳥類図鑑と高く評価されている（鈴木 , 1994: 173；堀田・鈴木 , 2006: 1-4）。

堀田は、松平定信とは職務上のつながりだけでなく、共に文化活動を楽しむ、最も親しい友人関係を続けたことが知られている（高澤 , 2012: 268-269）。学問や芸術好きの定信が、老中職を退いてからは、彼のもとに文人や画家、学問好きの諸侯が集まり、

堀田もそうした文化的なサロンに加わっていた。若年寄には、学者や絵師たちを監督する総責任者という職務もあったが、堀田自身、鳥類研究に打ち込んだ博物学者であった（鈴木 , 1994: 188）。堀田の役職、関心、経験、情報収集などを考えると、航路図とロシア民族の人物絵を組み合わせた『ロシア風俗画』を作ることを指図したのが堀田であっても、決して不可解ではない。

人物画の絵師と巻子の制作企画者の特定作業を通じて、『ロシア風俗画』が、誰のために、どのような目的で作られたのか、どのように活用されたのかを解明することを今後の課題とする。

VI　おわりに

本稿では、航路の線が描かれた世界図とロシア諸民族の人物図で構成された『ロシア風俗画』（巻子）を取り上げ、何が描かれているのか、どのような資料に基づいて描かれたのかを突き止めるために、世界図を中心とした予備的な調査報告を行った。その結果、次のようなことがらを明らかにすることができた。『ロシア風俗画』の 45 点の人物図は、Georgi（1776-1780）が著したロシア帝国の諸民族についての書物に含まれる彩色銅版画の写しであり、この Georgi（1776-1780）の書は、1804 年にロシア使節レザノフが長崎に来航したおりの日本側への贈品の一つであった。『ロシア風俗画』の世界図はアジア大陸とオセアニアの大半が失われているが、そこに描かれている 2 本の航路は、レザノフ一行の乗った艦船の周航路を示すもので、ロシア艦乗組員からの情報に基づいて長崎奉行所で作成された地図の航路の特徴と一致する。けれども、世界図の陸地や領域の描き方は、レザノフ一行が将来したどの地図とも、長崎奉行所で作成された航路図やその写しとも、また、ロシア艦船の艦長クルーゼンシュテルンが世界周航後に作った世界図とも、いずれとも異なる。『ロシア風俗画』の世界図の原図は、ボアソ（Boisseu）の東西両半球図（1645 年頃）であり、18 世紀末頃、長崎の通詞たちがその写図の作成に関わっていたものである。ただし、『ロシア風俗画』の世界図は、現在、所在が明らかになっている数点の写図よりもさらに小さなサイズの未完成の東西両半球図である。

『ロシア風俗画』の構成は変則的ではあるが、やはり鎖国時代に多く制作された万国人物図の一種であり、ロシアを介して世界に目を向けようとする特異な図譜としてとらえうるものである。万国人物図の形態や内容だけでなく、制作意図の多様さを示すという点で、万国人物図研究の視野を広げる意義も有する。また、この巻子の成立が、レザノフ来訪と密接にかかわっていることを踏まえると、当時の日本の社会情勢を示す資料であることは確かである。19 世紀に入り、日本を取り巻く国際情勢の緊張とそれによってオランダ通詞や蘭学者たちが西洋の学問や地理情報の学習の必要に迫られる状況のなかで、『ロシア風俗画』が、どのような目的で、また、どのような経緯で制作されたのかを明らかにすることを、今後の課題とする。

［付記］　本研究は、一般財団法人橋本循記念会調査・研究助成「京都大学蔵「苗蛮図」及び和製中国古地図の総合的研究」（令和 3 年度）（代表：杉浦和子）ならびに科学研究費基盤研究 C「古地図に描かれる山西辺境地域ならびに首都北京の防衛空間の構造分析」（2018-2021 年度）（課題番号：18K01137）（代表：杉浦和子）、京都大学大学院文学研究科人文知連携拠点の助成による東アジア「間文化」研究会（2020-2021 年度）の調査・研究活動によるによる成果の一部である。調査に際しては、愛日文庫を守る会代表の丸山悦治氏、シーボルト祈念館の織田毅氏、また、横浜市立大学学情センター、文化学園大学図書館、静岡県立中央図書館ならびに長崎歴史博物館の方々に大変お世話になりました。国立民族学博物館所蔵の Georgi（1776-1780）の彩色銅版画の閲覧に際しては、野林厚志教授にご協力いただきました。記して御礼申し上げます。

注

（1）京都大学文学研究科図書館所蔵、請求記号：地理貴 ||L3||507|| 貴重。

（2）文学研究科図書館からいただいた図書原簿の情報による。

（3）長谷川延年（1833）.『万国人物図纂』（2 巻）（京都府立京都学・歴彩館所蔵）. http://www.archives.kyoto.jp/websearchpe/detail?cls=152_old_books_catalog&pkey=0000000205. 2021 年 10 月 22 日閲覧 .

（4）文化学園大学図書館に所蔵されている Georgi 原著のロシア民族誌は次の 2 種である。フランス語版の 3 巻（第 4 巻が欠）：Georgi, J. G.（1776）. *Description de toutes les Nations de l'Empire de Russie*. St. Petersbourg: Charles Guillaume Müller, 3 v.: ill.（etchings, hand-col.）. 第 1 巻から第 3 巻までの各タイトルは、“*Les Nations d'origine Finnoise*”, “*Les Nations Tatares*

établies : dans cet Empire", "*Les Nations Samoyedes et Mandshoures, et les peuples les plus orientaux de la Sibirie*".
https://digital.bunka.ac.jp/kichosho/search_list2.php?shoshi_id=134. 2021 年 10 月 22 日閲覧 .
95 点の銅版画のみ収録した版：[*Beschreibung aller Nationen des russischen Reiches, ihrer lebensart, religion, gebrauche, wohnungen, kleidungen und ubrigen Merkwurdigkeiten*] / [von Johann Gottlieb Georgi]. — [C.W. Müller], [1776-1780], 95 leaves of plates: ill.（copper., col.）（標題等の記載がない）文化学園大学図書館によると、フランス語版は 1998 年に、銅版画集は 1973 年に、日本の古書店から購入したもの。

(5)『外国人男女風俗画』< 露国一部及び西比里亜、蒙古等 >（岩瀬文庫所蔵：函番号（資料番号）110-25)。岩瀬文庫によると、領収年月日は大正 5（1916）年 3 月 9 日、価格は 12 円 00 銭。

(6) 関西大学図書館には、フランス語版の第 3 巻が所蔵されているが、彩色銅版画の挿絵はなく、テキストのみである。

(7) 国立民族学博物館に所蔵されている版は、4 巻を 1 冊に合わせた版で、テキスト中に 95 点の彩色銅版画が挿絵として入っている。Georgi, J. G.（1776-1780）. *Beschreibung aller Nationen des Rußischen Reichs, ihrer Lebensart, Religion, Gebräuche, Wohnungen, Kleidungen und übrigen Merkwürdigkeiten*. St. Petersburg: C.W. Müller, 4 v. in 1: ill.（some col.）. ちなみに、第 4 巻のタイトルは、"*Mongoliische Völker, Russen und die noch übrigen Nationen*".

(8) 織田毅（2011）による翻刻「魯西亜滞船中日記」(4) の 140 頁に、通詞たちへの贈品のリストが挙がる。

(9)『通航一覧』巻 282（国書刊行会編（1912).『通航一覧』第七 , 197-198)。

(10) ロシアからの贈り物として、2 つの地球儀、4 枚のロシア帝国の地図、ロシアの民族について書かれた 2 冊の本の言及がある。和訳の『日本滞在記』にある四冊は誤りか。同書の訳注（三　神崎沖にての（1））にも、ロシア側から日本側への献上品として、『露西亜に住む民族について』二冊、ロシア地図四セットと記載されている（403 頁)。

(11) レザノフの将来したロシア国地図の原図および訳図や写しの系統については、吉田（1986: 100-101）を参照されたい。レザノフの将来した 4 枚のロシア国地図のうち、鮎沢（1962）が入手し、確認した原図三枚とその日本語訳の地図は、横浜市立大学学情センター（鮎沢文庫）に所蔵され、訳図は、横浜市立大学所蔵の古地図データベースで公開：http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~ycu-rare/pages/WCT_1.html?l=1&n=204. 2021 年 10 月 22 日閲覧 .

(12) 山田聯『北裔図説集覧備攷』（国立国会図書館所蔵)。書誌情報および公開画像の URL：https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542502. 2021 年 10 月 22 日閲覧 . 高橋景保『北夷考』では、本木の進呈したアロウスミス図について、「近時官物御蔵トナル所ノ諳厄里亜国「アルロウスミット」ナル者、新製輿地図一葉アリ。コレ彼一千七百八十年［我安永九年庚子］製スル所、地球全覧ノ方図ナリ。古今舶来諸地図仲、コレヨリ精ナルハナク、マタ新製ナルハナシ。」と評している（秋葉 , 1991: 318).

(13) 松原右仲復刻・大槻磐渓識語『銅版萬國輿地全圖』（識語の年号は天保 9（1838）年）（早稲田大学所蔵)。『銅版萬國輿地全圖』書誌情報と画像の URL：https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_c0013/index.html. 2021 年 10 月 22 日閲覧 . 大槻磐渓は、『環海異聞』をまとめた大槻玄沢の息子。識語に、ロシアへ漂流した漂流民たちが持ち帰った地図であることが述べられている。なお、『通航一覧』（巻之 318（魯西亞國部四十六　○漂流）によると、文化 2（1805）年六月、幕府側の評議において、漂流民たちが持ち帰ったもののうち、「横文字本幷世界圖船等取上、金銀錢等も取上、右代會所銀を以引替爲相互渡」となった。

(14)「長崎志續編　巻十三之上・中・下：魯西亞船到港之部　附漂流民送來之事」の翻刻は、田辺茂啓・小原克紹著；丹羽漢吉・森永種夫校訂（1839）.『續長崎實録大成』（長崎文献社編 .（1974）.『長崎文献叢書』第 1 集第 4 巻）の 563-731 頁、トレースされた「魯西亞乗圖」は 566-567 頁に掲載されている。「長崎志續編」の引用箇所で、［ ］内は割注に記されたものである。ロシア側から聞き取ったロシアの暦には日本の暦が併記されている。

(15) 海野（1977: 121-122）は、『俄羅斯雑話』（上下二冊）（横浜市立大学）と題するレザノフ来航の一件に詳しい写本（横浜市立大学図書館所蔵）に、『魯西亜漂流之記』の航路図と同系統の世界図が収められていると指摘している。『俄羅斯雑話』は題名に亞の文字を欠くが、武田孟文『俄羅斯亞雑話』と同じ内容の写本である。

(16) 海野（1977: 122）は、『魯西亜漂流之記』の著者を山片蟠桃（1748-1821）（大坂の升屋の番頭で実学思想の学者）と推測しているが、飯塚（2008）は、愛日文庫所蔵『魯西亜漂流之記』の筆跡が山片重芳（升屋の四代目当主）のものであるとの鑑定結果を報告している。

(17)『視聴草』の航海図や人物図は、国立公文書館デジタルアーカイブで公開されている：https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/detail/detailArchives/0202020000/0000000040/01. 2021 年 10 月 22 日閲覧 .

(18)［世界図（仙台漂民津太夫らの航路朱筆地図）］の右の余白に、漂流民たちがロシア人乗組員から、彼らがロシアで買い求めた世界図の上に日本への航路を書き入れてもらったことを述べた、『環海異聞』の一節がペン書きで引用されている（おそらく鮎沢によるペン書き）。鮎沢（1962）は、同図の裏面に、「付札もて、文化元甲子年九月六日長崎港エヲロシヤ船入津之節、乗組之内、奥州ノ漂民四人ノ者共所持ノ小図。魯西亜本国ヨリ日本長崎エノ船路大略小図。添田安節亭ヨリ借写」と朱書」されていることを根拠に、大槻玄沢の『環海異聞』に付されている漂民航路図も、これと同一原図から出たものと推論している。ベースマップが何かの問題は別にして、［世界図（仙台漂民津太夫らの航路朱筆地図）］自体は、長崎奉行所で、ロシア側の提出した航路図をもとに作成された「魯西亞乗筋圖」（『長崎志續編』）と同じ系統に含まれる航路図とみなすことができる。同図は、横浜市立大学所蔵の古地図データベースで公開：http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~ycu-rare/pages/WC-0_48.html?l=1&n=59. 2021 年 10 月 22 日閲覧 .

(19) 1804 年 11 月 24 日に老中より届いた下知状で、「漂流人共へ者、決而應對等無之、咄合など仕儀、堅く相禁し候様可被致候、追而請取候節迄は、糺し等之儀も無之様存候」（巻之 280（魯西亞國部八））と通達されたことを受け、同月 26 日には、肥用豊後守と成瀬因幡守（ロシア船来航への対応のため二人奉行体制であった）から、「此度送來候漂流人え決而應對咄合等不爲致候様、被仰下奉承知候、來津之節漂流人共え檢使之者より相尋候趣、當九月八日申上置候、其後はいまた何等之儀も相尋不申、且又通詞、其外右船え罷越候者え者嚴敷申渡、決而漂流人應對は不爲仕候共、猶又嚴敷申付」（同）とさらに細かな指示がなされた。さらに、日本側へ引き渡された漂流民たちの処遇を幕府側が審議した際（1805 年 6 月 6 日）も、「此者共は、以來みたりに彼國之儀申觸し候儀無之様精々申付、他國出等は不爲致候様可仕旨相達候様、肥田豊後守、成瀬因幡守え被仰渡候方と奉存候」（巻之 318（魯西亞國部四十六　○漂流）と、念押しされている。

(20) 岩井（2013）は、『環海異聞』の原本が現存不明な状況のなかで、最良の本文を確定するための作業として、善本と目される宮城県魯書簡所蔵（旧伊達家本）と一関市博物館所蔵本との比較を通じて、愛日文庫所蔵本を、本文確定のために中心におくべき必須の写本とする。『環海異聞』の写本は比較的多く伝存しているが、愛日文庫系のものと旧伊達家本敬のものがあり、

伊達家・大槻家・堀田家にあった写本からの筆写によって広まったとしている（岩井 , 2013: 101）。

(21)「漂流民津太夫帰国航路図」（静岡県立中央図書館葵文庫所蔵）の公開画像 URL：https://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/aoi/2_history/290_3_131p.htm. 2021 年 10 月 22 日閲覧 .

(22) クルーゼンシュテルンの世界周航記の最初の邦訳版は『奉使日本紀行』（天保 11（1840）年序）（青地盈訳;高橋景保校）であるが、オランダ語版の翻訳とされ、アトラスはついていない。

(23) 林子平の『世界之図』は、仙台市博物館のサイトで公開：https://www.city.sendai.jp/museum/kidscorner/kids-08/kidscorner-06/kids-37.html. 2021 年 10 月 22 日閲覧 .

(24)『林子平の地球圖の写し』には、「安永乙未冬得之和蘭象胥松村世綱於肥前鎮臺舘写之　林子平」、更にまた、「于時寛政九季孟春所収於林氏得之而於化龍園間窓写之　里定式」と記される。松村世綱ではなく松村元綱である。横浜市立大学所蔵の古地図データベース：http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~ycu-rare/views/WC-0_43.html?l=1&n=54. 2021 年 10 月 22 日閲覧 .

(25) 中山武成『万国図』の画像は、神戸市立博物館のサイトで公開：https://www.kobecitymuseum.jp/collection/detail?heritage=365282. 2021 年 10 月 22 日閲覧 .

(26) Boisseau の世界図は、世界で最も早い時期に作成されたフランスの壁掛け地図の一つ。現在、フランス国立図書館に所蔵される世界図は、上部のタイトルならびに左右両側の縁飾り部分を欠く。これらを備えた Yale 大学所蔵の世界図の大きさは、1345 x 2400mm である（Shirley, 1983: 385-387）。フランス国立図書館で画像公開：https://catalogue.bnf.fr/ark:/12148/cb406997176. 2021 年 10 月 22 日閲覧 .

(27) 本木庄左衛門（正栄）（1767-1822）は、寛政 8（1796）年より小通詞、文化 6（1809）年より大通詞。オランダ語だけでなく、フランス語や英語も学び、日本最初の英語学書『諳厄利亜興学小筌』（1811）、最初の英和対訳辞書『諳厄利亜語林大成』（1813）を完成させた（レザーノフ , 2000: 404（四章の訳注（2））。本木庄左衛門の父は、阿蘭陀通詞で蘭学者の本木良永（1735-1794）。良永は、やはり蘭学者で阿蘭陀通詞の松村元綱（生年不明、1976 頃没？）の考訂により、Hübner の地理書のオランダ語版から地図用法の部分を抄訳した『和蘭地図略説』（1771）を著した（岡田 , 2011: 110）。

(28) 中山作三郎（武徳）（1785-1844）は、大通詞を務めた阿蘭陀通詞。オランダ商館長ヘンドリック・ズーフの指導により蘭和辞書の編纂に従事し、天保 4（1833）年に完成させた。シーボルトの鳴滝塾設立に別宅を提供して協力した（呉 , 1968: 192-193；武内 , 1994: 273）。

(29) 函舘奉行羽太正養が 1799 年から 1807 年までの蝦夷地任務について詳細に書き記した『休明光記』（巻之八）（寺澤他 , 1978: 217）では、文化 4（1807）年 4 月に起きた蝦夷地へのロシア人の侵攻（文化露寇あるいはフヴォストフ事件）への対応として、「今度の一擧につき、若年寄堀田攝津守正敦朝臣、大目附飛驒守忠英、御目附遠山左衞門景晋、［金四郎改名して左衞門といふ］、御使番小菅伊右衞門正容、村上大學義雄を遣はわされ、追々函館へ至るべきよし執政方より仰せ下さる。」と記されている。なお、同書の巻之九の最後に、蝦夷視察に派遣された堀田正敦が函館でこの書（当時は、執筆中）を見て、蝦夷地の任務にあたる筑前守安論と安芸守正養の勤務を褒めた文章が記されている（寺澤他 , 1978: 257-259）。

(30) 大槻玄沢らが『環海異聞』をようやく脱稿したのは、文化 4（1807）年初夏、仙台藩主への上呈は同年秋であった（杉本 , 1986: 470）。堀田正敦が蝦夷地視察を命ぜられたのが同年 6 月 6 日、彼が藩から『環海異聞』を借り受けたのが 6 月 19 日、江戸出発が 6 月 21 日。出発に際して、玄沢の子、玄幹を随伴し、蝦夷から江戸に戻ったのは、同年 10 月 15 日（佐藤 , 1991: 30）。

(31)『松前紀行』（c. 1808: 51-54）によると、文化 4（1807）年六月、江戸を発って北へ向かった堀田正敦一行が、7 月半ば、野辺地湾に臨む地まで進んだあたりの記述として「をとゝしの春。北のえみしより。おくりかへされし仙だいの船子ふたり。かの國のさまたづぬることもあらんとて。ぐしたりしをよび出て。夜更くるまで。何くれのもの語するをきゝつ。」さらに、7 月 26 日、佐井の湊から函館に渡った後の記述として、「はこ館の政するたちにおもむき。かの國よりかへされしものども召し出でゝ。事のやうを尋ぬるをきく。」また、「例の人々を。假のやどりにいざなひ。仙臺の船子どもと。さきに。かの國よりにげ歸りし。南部うし瀧のかぢとり等。集めてありしやうを語らす。物いひ舌だみて言ひしらふほど。きゝわかぬ事ども多かり。」この記述のなかの「南部うし瀧のかぢとり等」とは、ペトロパヴロウスクから自力で脱出して、文化 3 年 7 月に択捉島へ戻った南部慶祥丸漂流民 6 名、「仙臺の船子ども」とは、文化元（1804）年にレザノフによって帰還した仙台漂流民四名のうち、すでに亡くなっていた者を除く二名とされる（木崎 , 1997: 192-193；鈴木 , 2000: 21）。

文　献

秋葉実（1991）.『北方史料集成　第一巻』北海道出版企画センター .

鮎沢信太郎（1940）. 林子平の地理思想に就て―世界地理を中心に―. 史潮 , **10**（2）, 233-254.

鮎沢信太郎（1945）. 伊能忠敬の地球圖について . 歴史地理 , **80**（1）, 41-48.

鮎澤信太郎（1950）. 江戸時代に刊行された萬國人物圖について . 横濱大學論叢 , **2**（3）, 157-183.

鮎沢信太郎（1952）. 幕末ロシア使節の将来した地図とその日本への影響 . 開国百周年記念明治文化論集 , 419-449.

鮎沢信太郎（1953）. 世界地理の部（開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識』乾元社）, 3-367.

鮎沢信太郎（1962）. ロシア使節レザノフの将来した地図 . 日本歴史 , **173**, 75-78.

飯塚修三（2008）. 愛日文庫蔵「魯西亜漂流之記」について . 懐徳 , **76**, 49-53.

岩井憲幸（2013）. 大槻玄沢・志村弘強編『環海異聞』本文確定の基礎的研究 . 明治大学人文科学研究所紀要 , **71**, 81-102.

ウォエンスキ（堀竹雄抄訳）（1908a）. 十九世紀初年日本に於けるロシア使節（一八〇三―五年レザノフ日本派遣）. 史学雑誌 , **19**（3）, 263-291.

ウォエンスキ（堀竹雄抄訳）（1908b）. 十九世紀初年日本に於けるロシア使節（第二回）（一八〇三―五年レザノフ日本派遣）. 史学雑誌 , **19**（4）, 371-390.

ウォエンスキ（堀竹雄抄訳）（1908c）. 十九世紀初年日本に於けるロシア使節（第三回）（一八〇三―五年レザノフ日本派遣）. 史学雑誌 , **19**（7）, 727-757.

海野一隆（1977）. 漂流民津太夫らの帰国と地図の伝来（有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅳ』創元社）, 101-122.

海野一隆（1995a）.『環海異聞』の知られざる善本（上）. 日本古書通信 , **795**（10）, 5-7.

海野一隆（1995b）.『環海異聞』の知られざる善本（下）. 日本古書通信 , **795**（11）, 20-21.

海野一隆（2004a）. 江戸時代刊行の東洋系民族図譜の嚆矢 . 日本古書通信 , **896**（3）, 3-6.

海野一隆（2004b）.『異国物語』の種本 . 日本古書通信 , **902**（9）, 12-13.

大槻玄沢（1804）［大友喜作編・解説・校訂（1944）］,『環海異聞』北光書房 .

岡田俊裕（2011）. 本木良永（岡田俊裕『日本地理学人物事典（近世編）』原書房）, 109-114.

岡田俊裕（2011）. 林子平（岡田俊裕『日本地理学人物事典（近世編）』原書房）, 115-121.

岡田俊裕（2011）. 松村元綱（岡田俊裕『日本地理学人物事典（近世編）』原書房）, 122-127.

小川恭一編著（1997）.『寛政譜以降旗本家百科事典』全 6 巻 . 東洋書林 .
織田武雄（1990）. 伊能忠敬の「地球図」. 地学雑誌 , **99**（3）, 279-280.
織田毅（2007-2008, 2010-2012）. 史料紹介　中山文庫「魯西亜滞船中日記」（1）～（5 止）. 鳴滝紀要 , **17**, 127-137；同 **18**, 75-95；同 **20**, 65-88；同 **21**, 117-141；同 **22**, 111-126.
小野田一幸（1999）. 蘭学の発達と世界地図（三好唯義編『図説世界古地図コレクション』河出書房新社）, 114-123.
河合忠信（1997）. クルーゼンシュテルン「世界周航誌」について（放送大学図書館編集『クルーゼンシュテルン世界周航図展：ロシア人が見た 200 年前の日本とその周辺』放送大学図書館）, 4-5.
芳即正（1976）. 島津重豪に仕えたオランダ通詞松村元綱 . 鹿大史学 , **24**, 1-13.
木崎良平（1997）.『仙台漂民とレザノフ』刀水書房 .
京都帝国大学文学部地理学教室編（1934）.『地理論叢　第三輯』古今書院 .
クルウゼンシュテルン（羽仁五郎訳注）（1931）.『クルウゼンシュテルン日本紀行』（上巻・下巻）, 駿南社 .
呉秀三（1968）.『シーボルト先生：その生涯及び功業』全 3 巻 , 平凡社 .
桑木彧雄（1926a）. 本木仁太夫良永の事績―長崎の阿蘭陀通詞。地動説の我國最初の解説者―. 科学知識 , **6**（11）, 1116-1120.
桑木彧雄（1926b）. 本木仁太夫良永の事績（その二）―長崎の阿蘭陀通詞。地動説の我國最初の解説者―. 科学知識 , **6**（12）, 1217-1221.
国書刊行会編（1912）.『通航一覧』（全 8 巻）国書刊行会 .
佐藤昌介（1991）. 大槻玄沢小伝（洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』思文閣出版 , 1-44.
佐藤久（1990）. 口絵 1：伊能忠敬筆「地球図」. 地学雑誌 , **99**（3）, 口絵 .
杉本つとむ（1986）.『環海異聞』の成立事情と日魯交渉小史（大槻玄沢 , 志村弘強編；杉本つとむ他解説『環海異聞：本文と研究』八坂書房）, 465-499.
鈴木道男（1994）. 堀田正敦（『彩色江戸博物学集成』平凡社）, 173-188.
鈴木道男（2000）. 若年寄の蝦夷地視察：堀田正敦の『觀文禽譜』（六）. 国際文化研究科論集 , **8**, 13-29.
高澤憲治（2012）.『松平定信』吉川弘文館 .
武内博（1994）. 中山作三郎（『日本洋学人名事典』柏書房）, 273.
武田孟文『俄羅斯亞雑話』（文化 3（1806）年序）（写本）.
田辺茂啓・小原克紹著；丹羽漢吉・森永種夫校訂（1839）.『續長崎實録大成』（長崎文献社編（1974）.『長崎文献叢書』第 1 集第 4 巻に所収）.
中村士（2020）. 啓蒙天学家朝野北水の「文化年間世界地図」―仙台漂流民津太夫らの帰国航路を示した世界図の新史料 . 東洋研究 , **216**, 1-33.
羽太庄左衛門正養（1807）.『休明光記』巻一～九（寺澤一他編（1978）.『北方未公開古文書集成』第四巻 , 叢文社）.
堀田正敦（c.1808）.『松前紀行』（鈴木省三編（1924）.『仙臺叢書　第六巻』仙臺叢書刊行會）, 37-85.
堀田正敦著・鈴木道男編著（2006）.『江戸鳥類大図鑑：よみがえる江戸鳥学の精華『観文禽譜』』平凡社 .
ポロヴニコヴァ・エレーナ（2013）. 近世庶民の「世界」像：節用集の世界図を中心に . 日本思想史研究 , **45**, 62-93.

宮崎成身編『視聴草』（内閣文庫所蔵史籍叢刊／史籍研究会編（1985）；特刊第二 , 汲古書院), 181-230.

三好唯義編（1999).『図説世界古地図コレクション』河出書房新社 .

山田聯『北裔図説集覧備攷』（文化 8（1811）序）（写本).

レザーノフ（大島幹雄訳）（2000).『日本滞在記―1804-1805―』岩波書店 .

『魯西亜漂流之記』（文化 2 年（1805）末頃）（愛日文庫所蔵).

吉田厚子（1996). 長谷川延年書写『西洋雑記』『万国人物図纂』に関する二、三の検討 . 洋学 , 5, 63-129.

Авдюков Ю.П.,Ольхова Н.С., Сурник А.П.（составители). 1995. *Командор: страницы жизни и деятельности двора его императорского величества действительного камергера, руководителя первой русской кругосветной экспедиции Николая Петровича Резанова*. Издательский отдел ПИК.

Georgi, J. G.（1776-1780). *Beschreibung aller Nationen des Russischen Reichs, ihrer Lebensart, Religion, Gebräuche, Wohnungen, Kleidung und übrigen Merckwürdigkeiten*. 4 Bände, mit colorierten Kupfern. St. Petersburg: C. W. Müller.

Krusenstern, Adam Johann von（1813). *Atlas of the voyage round the world*. New York: Da Capo Press（Reprint（197?). Originally published: Sanktpeterburg: Morskoiĭ tipografiĭ).

Shirley, R. W. 1983. *The mapping of the world, early printed world maps 1472-1700*. Holland Press, 385-387.

Preliminary observation on the world map depicted in "*Roshia fuzoku ga*" (pictures depicting Russian people and their costumes) (scroll)

TANAKA Kazuko

"*Roshia fuzoku ga*" (pictures depicting Russian people and their costumes) (scroll, 20.6 x 939.5 cm, hand-coloring; collection of Library of Graduate School of Letters, Kyoto University) is a tentative name. This scroll lacks an original title, preface, postscript, or author or painter's name. The scroll consists of two parts, the first of which features a world map, followed by 45 pictures depicting Russian people and their costumes. This world map omits the majority of Asia and Oceania. Two dotted lines are drawn with ink and vermilion on the map. Along the dotted lines, there are several notes of distances and waypoints. Areas within the continent are partitioned with different colors, and the names of places are specified. Some pictures have brief caption, such as "Lapland; picture depicting a fisherman". The combination of a world map and pictures about Russian people differs from the standard composition of 'bankoku jinbutsu zu (pictures depicting people of various ethnic groups in the world),' which were produced in the Edo period. This paper provides a preliminary report focusing on the world map in order to clarify the circumstances and purpose for which this scroll was created.

Detailed examination of various literature and historical materials clarifies the following points regarding the scroll and the world map: (1) The figures of "*Roshia fuzoku ga*" are a hand-drawn replica of the colored copperplate prints in Georgi's work (1776-1780). They correspond to Nos. 1 to 55 (excluding Nos. 5, 6, 33 to 40) among the figures of Nos. 1 to 95 of the original version. (2) Georgi's art book of colored copperplate prints depicting Russian people (1776-1780) was first brought to Japan in 1804; it was a gift from the Russian envoy Rezanov, who came to Nagasaki for negotiation on trade and the return of four drifters from Russia to Japan. (3) Rezanov and his team also gifted to Japan four complete maps of Russian Empire made in Russia,

and a map printed by Arrowsmith. Additionally, circular- and square-shaped world maps were given by the drifters, who purchased them in Russia. On the square map, one of Russian crews drew the route from Russia to Japan for the drifters. (4) In addition to the drifters' maps, two types of maps were created to depict the routes of the Russian ship on which Rezanov and others were traveling. The Nagasaki Magistrate's Office created several route maps and their hand-drawn copies, and the Russian ship captain Kruzenstern created the world map depicting his routes for World Circumnavigation Report. (5) Some of maps created by Nagasaki Magistrate's Office in September 1804 were based on interviews with the Russian ship's crew. On those maps, two routes are drawn; the arrival course from Russia to Japan is drawn in black, and the departure course from Japan to Russia is drawn in vermilion. Other maps created by the Office toward the end of March 1805 were based on interviews with the drifters. These maps depict the only arrival course from Russia to Japan. Krusenstern's Atlas, published in 1813, depicts the actual route they sailed. (6) The sailing routes of the world map of "*Roshia fuzoku ga*" appear to be much like drawing the arrival and departure routes of Russian ship created by the Nagasaki Magistrate's Office. (7) The base map sets the world map of "*Roshia fuzoku ga*" apart from other route maps. California is depicted as an island, with areas in the Americas, Africa and Europe divided, color-coded, and named. (8) Very similar to the world map of "*Roshia fuzoku ga*" are the world maps, which are hand-drawn copies of Jean Boisseau's world map (c. 1645). Around the end of the 18th century, the Dutch interpreters of Nagasaki were involved in the creation of these drawings. Some of their sons worked as interepreters during Rezanov's stay in Nagasaki. (9) Boisseau's world map and their hand-drawn copies depict the world map, combining the eastern and western hemispheres. The world map of "*Roshia fuzoku ga*" is considered an incomplete copy as it lacks the ecliptic and the circular frames of the spheres. Its size is smaller than that of other reduced copies.

The following observations are based on preliminary research at this stage. "*Roshia fuzoku ga*" is also one of 'bankoku jinbutsu zu' created during the Edo period's isolation

system, although it has an irregular composition. Given the close relationship between Rezanov's arrival and the creation of "*Roshia fuzoku ga*," it is reasonable to assume that this scroll reflects the social situation in Japan at the time. This scroll indicates not only the international tensions surrounding Japan, but also the efforts of Dutch interpreters and scholars in learning about western books and maps.

Several questions remain unanswered regarding the background and purpose of the production of "*Roshia fuzoku ga*". For example, questions pertaining to the painter who copied the figure, as well as the person who intended to combine a world map and pictures depicting Russian people to make this scroll, are issues for future research.